

平成 23 年 3 月 22 日

東北関東大震災 被災地(宮城県仙台市)入りの記録【暫定版・内部限】

神山 洋介

3/19(土) 小田原～那須塩原

前日より被災地入りの準備開始。往復分のガソリン、食糧・飲料水(3日分)、防寒具、手袋、長靴、安全靴、地図、ライト、ガス燃料等。

14時、自家用車にて単独、小田原発。小田原厚木道路～東名高速～首都高速～東北道(宇都宮まで)～国道4号線の経路にて、仙台まで約500キロの予定。北関東以北、被災地までの動向を検証するため、宇都宮からは一般道を250キロ北上。



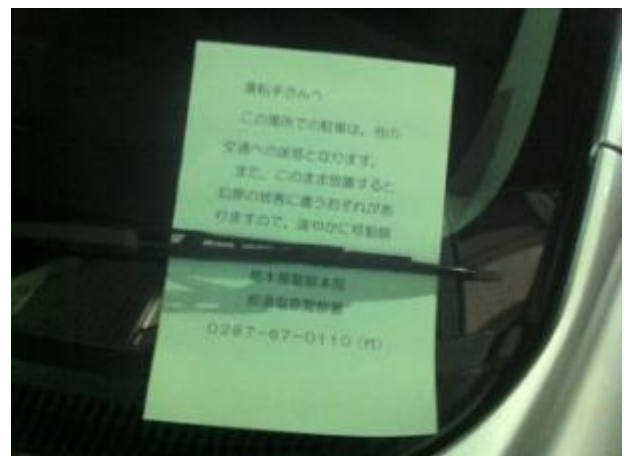
19時、那須塩原(栃木県)到着。東北新幹線は那須塩原以南が運行中。西口ロータリー周辺のコインパーキングが軒並み「満車」。圧倒的に福島ナンバー。閑散としているなか、マスクをして靴を持つ数名の姿と、予約車と表示されたタクシー2台。駅売店の棚は通常どおりの販売、自販機も売り切れなし。

東口(福島県側)は、ロータリーが駐車車両で溢れている状態。約100台、福島ナンバー7割と宮城ナンバー2割、その他1割。被災地から、特に福島から自家用車で避難し、車両を放置して新幹線にて避難したものと思われ、慌てた様子が見えがえる。

フロントガラスには、「放置しないでください」(栃木県警)との紙あり。



20時、那須塩原にて、国道沿いビジネスホテル泊。走行距離312キロ。



3/20(日) 那須塩原～仙台

8時発。現地移動分のガソリンがやや不足につき、給油を試みる。那須塩原付近は、どのSSも数百メートルの給油待ち。30キロほど戻り、矢板市内にて給油。再び、国道4号線を北上。

12時、福島県内に入る。徐々に、屋根にかぶせたブルーシートや割れた窓ガラスをふさぐ段ボールなど、沿道家屋に被害が見られるようになり、時折、道路にも段差。SSの渋滞が徐々に目立つ。福島県内にて、最長2キロの給油待ち箇所あり。仙台まで約200キロ北上。

16時、仙台市内入り。地震被害は、福島県内よりも目立たない。予想以上に普段どおりに見える。スーパー営業中も、店内にはレジ待ち数十人、グレープフルーツが見える。コンビニは開いていない。自転車が多いのはガソリン不足ゆえ。ベローチェ(コーヒー)が営業中。給油待ちも変わらず。



16時半、仙台市役所脇に駐車。市役所は半旗が掲げられているものの、避難者等の姿はない。バス停に大きな荷物を持った15名ほどが見えるが、着飾った女性の集団もその脇を通り過ぎ、作業服姿の私が奇異に映る。県庁前の公園では、ギターを抱えた若者50人ほどがイベントを終了するところ。県庁にて、陸自の災害派遣隊や、防災服姿の数名をようやく目にする。



宮城県連事務所訪問。斎藤やすのり議員(宮城2区)とドッキングし、被災状況等をヒアリング。ここ2日で、かなり落ち着いてきたとのこと。都市ガス復旧には2~3か月を要するものの、市内大半は電気・水道が復旧。物資について、量の問題が解消されつつある一方、ロジスティクスが大きな課題。津波被害のない被災者は、徐々に自宅へ帰り、避難所も閉鎖箇所が増えてきた、など。

仙台市内の一部をみて、宮城県全体を推し量ることは困難だが、少なくとも中心部は安定化に進んでいる印象。

17時、斎藤議員とともに、若林区荒浜へ向かう。発災直後、数百の遺体が発見されたと報道された箇所。中心部から約15分、8キロほどの距離か。若林区内にはいっても、しばらくは災害の様相少。

海岸から3キロほどの距離を海岸と並行してはしる仙台東部道路(5メートルの盛り土)をくぐると、様相が一変。突如、ガレキの山と大破した車両、根からもぎ取られて横たわる大木…。付近は、有数の米産地というが、田には黒く濁った海水がなお残り、様々なものが流れ着いたまま。

下層が流され、二階部分のみが道端に残り、木造家屋は一切残存なし。やや原型をとどめている住宅群跡は、数メートル高い位置と新しさに起因するように見える。四階建ての荒浜小学校も残るが、三階まで津波にさらされた痕跡あり。セブンイレブンのあとは、かろうじて残る看板の残骸。うっそうと茂っていたという海岸沿いの松林は、陸側に傾いた状態でわずかに残存するのみ。

必ずしも全ての人が津波警報で逃げなかったという話、5～60名ほどの入居者があったと思われる老人福祉施設の惨状と早期避難の困難さ、コンクリートさえ引きちぎられる津波の力、事実、なにも残っていない浜から3キロほどの荒浜地区を目にしつつ、海岸へ。

白い浜と穏やかな波からは、海水浴場としての夏の情景が目に見え。海に向かって、しばし合掌。

被災県の被災地区と周縁部のギャップは非常に大きい。ライフライン、物流、燃料等の課題は通ずるものの、日常生活を取り戻すまでの道のりは、同じ被災地にも大きな格差がある。市内中心部と津波被害地区の絶望的に大きなギャップは、「被災地」と総称することをためらわせる。周縁部の



早期復旧は、今回の震災における被災者対策の大きな柱になる。

3/21(月) 仙台～小田原

8時、仙台市内、朝の状況を車で回りながら確認。給油待ち車列が各所にてキロ単位。スーパー前には行列 500 人規模。コンビニは全て閉店。ファミレスはいくつか営業。車は少ないものの、LPG のタクシーは健在。電車が高架上や線路上で停まったまま数か所。

9時、県庁内に設置された、政府現地対策本部表敬。約 30 人。



その後、県庁脇にある県社協へ。県・災害ボランティアセンター開設済。状況をヒアリング。各市にて、社協等を中心に順次センターが立ち上がっている状況。いわゆるプロ・災害ボランティアが、各センターにも入り、立ち上げ支援を行っているとのこと。ボランティア・ニーズが増えるには、あと1週間ほどを要するか。現状は、近隣市等からのボランティアが余剰気味。一般ボラが活躍する地震被害がそれほど巨大でなく、一方、一般で対処しきれない津波被害が甚大であることが、過去の災害ボラ・タイムテーブルと異なる展開を生じている。そろそろ1クールを終え、交代人員(マネジメント側)が必要になる予想あり。

市町村名	活動名	状況
村田町
美里町
石巻市
塩釜市
仙台市
白根町
山元町
川崎町
川内町
白土町



10時半、仙台空港(名取市)東側、空港と海の間位置する地区へ。空港へ押し寄せた津波はこの地区を通過した。昨日の荒浜と同様、津波のあった場所から突然様相が変化。時間帯の違いからか、片づけに来た住民の方が多い。ただし、どこから手をつけていいかと思しき、立ちすくむ姿が目につく。

今日から、自衛隊による遺体捜索が始まったとのこと。海水につかった田で長い棒を突きながら、救助犬を使つてのガレキの中など、各所で現場を目にする。

見渡す限りに広がる津波被害の現場を一か所一か所捜索していく姿に頭が下がる。気の遠くなるような作業。

仙台空港は復旧作業が始まった様子。簡単に復旧できるようには見えない。隣接する陸自駐屯地、航空大学校もかなりの被害がありそう。それぞれから流出したと思われるドラム缶等を道端に目にしながら、当地をあとに。



12時、降雪の予報もあるため、帰路に。まずは宇都宮まで約250キロを一般道で南下。

13時、福島県内に入る。走りつつ、ローカル放送(テレビ)を見ていると、原発一色の報道。今朝発表された、水、ハウレンソウ、牛乳等の放射線基準値超え、雨への対策、放射線リスクに関する内容など。視聴者からのFAXメッセージ、キャスター・コメンテーターの発言、事実を伝えようとする部分と、不安の増幅の要素が入り乱れる。これでは、誰でも不安になる。

途中、予備タンクから給油しつつ、国道4号線を宇都宮まで、東北道、首都高、東名、小田原厚木道路を経由。9時間、450キロ(トータル1,100キロ)、21時小田原帰着。



以上